

6月27日 使徒言行録4章32~37節 今日の説教から

説教題：「賜物を分かち合う理想の世界」

スイス出身の神学者カール・バルト（1886～1968年）が『右手に聖書、左手に新聞を持つように』と言ったように、私たちキリスト者は聖書の言葉と私たちの現実を照らし合わせながら生きなければいけません。私たちは日々行う一つ一つの判断・決断を聖書の言葉を使って説明し、聖書を根拠に行動するべきであり、それが「信仰を生きる」というものなのだと言われています。

今日の聖書箇所では、初代の教会の中で貧しい信徒を助けるために裕福な信徒が自分の持つ財産を捧げる様子が記されています。土地や財産を持っている人がそれを売り、集まったお金を分配するという「富の再分配」が行われることによって、貧富の差という大きな問題を解消していました。

このように貧富の格差をなくし、裕福な人が貧しい人や社会的な弱者を支える社会を作り上げよう、という思想に、「社会主義」というものがあります。社会主義の「社会」という言葉は、「個人」の反対になる言葉であり、フランス革命の中で「自由、平等、友愛」というスローガンを普及させた人物、ピエール・ルルーという人によって提唱されたものが原点になっているそうです。つまりは、「個人優先で物事を考えるのではなく、自由・平等・友愛に基づいて社会全体が共に幸福になる道を探す」という考え方方が社会主義の根底にはあるのです。

それをさらに発展させたものに「キリスト教社会主義」というものがあります。これは、「隣人を自分自身のように愛しなさい」というレビ記の19章18節の言葉と、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」というマタイによる福音書の7章12節に示されているように、だれもが同じだけの「愛を受け取る」ことが出来るように、という部分に焦点を当てた行動原理です。「個人優先で物事を考えるのではなく、自由・平等・友愛に基づいて社会全体が共に幸福になる道を探す」という考え方方は、イエス様の言葉に沿った生き方であることは、確かなことだと思います。私たちは、人間が持つ「自分を何よりも優先する」という根源的な罪から救い出されて、「神様を第一に愛すること」「隣人を自分のように愛すること」の大切さをイエス様の十字架、「罪の贖い」によって知っています。「何よりも自分を優先する」ことが間違いであることを知っていて、神様を大切にして、隣人を大切にする愛の行いこそが神様が望んでいるのだ、という事を聖書の言葉によって教えてもらっています。

私たちは、一人一人が「得手不得手」という「個性」がある存在として神様に作られています。その得意なこと、自分が持っている賜物を活用して、誰かが苦手としていることを助けることが出来ます。自分が足りない部分を、誰かから支えてもらうことが出来ます。そのように、お互いに足りない部分を補って支えあう社会が、今日の聖書箇所に記されていたように、最初の教会に現れていました。それが「キリスト教社会主義」という形で、今この時代においても芽吹いています。私たちの教会や、私たちが接する隣人たちとの交わりは、「社会」というには少し小さな輪にはなりますが、そこには人ととの関係がある以上、確かに一つの「社会」がそれぞれの場所にあります。その中で、私たちは「努力が報われる」という資本主義的な側面を持ちながら、「互いが互いを支える」という社会主義的な理想を知っています。私たちが神様の愛によって深く満たされているように、私たちは神様から頂いている多くの賜物によって誰かを満たすことが出来るのです。「賜物を分かち合う理想の世界」を実現するための力を神様から頂いている、その喜びを胸に、今週一週間の、これから歩みを共に進めていきましょう。